京都大学教育研究振興財団助成事業
成　果　報　告　書

平成22年11月10日

財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長　辻　井　昭　雄　様

所属部局･研究科　人間･環境学研究科

職 名･学 年　博士後期課程 3年

氏　　名　山 内 熱 人

助成の種類	平成 22年度 ・ 中期派遣助成	
研究課題名	現代化する先住民農村における祝祭の変化と維持：メキシコ、オアハカ州の一村落の事例より	
受入機関	Centro de Investigaciones y Estudios Superiores en Antroporogia Social	
渡航期間	平成22年7月10日　～　平成 22年10月11日	
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度･和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料　☐ 無　☐ 有(　　)	
会計報告	交付を受けた助成金額	75万円
	使用した助成金額	75万円
	返納すべき助成金額	0円
	助成金の使途内訳	航空賃、空港使用料、旅券交付手数料、燃油 20万円
		査証手数料（入手のための諸経費含む） 5万円
		バス賃、鉄道賃 5万円
		宿泊料 45万円

成果の概要／山内熱人

今回の調査では、報告者の調査地であるメキシコ、オアハカ州の州都オアハカ市近郊のサポテコ人の住む村、サンライムンドハルパンの生活の実態を記録し、あわせてそれらがかつてとどのように変化した結果であるのかを聞き取りすることを目的とした。調査期間は、2010年の7月から9月末。
この調査地は、人口が1584人、面積が19.14平方キロメートルの村である（2000年現在）。主な産業はなく、多くの人が農業で生計を立てている。

調査したこと
複数の世帯に対して、世帯構成と世帯間関係、収入と支出を聞き取り調査した。また、幾つかの祝祭を観察し、店の配置を記録した。加えて、現在の家畜、畑の扱い方、ある世帯の日々のやらなければならないことと暮らし振りを観察した。
これらの観察をもとに、3，40年前とどのように変化したのかについて聞き取り調査した。

結果
１、生活（物質文化）の変化（インタビューにより構成）
それぞれの家庭で作っていたトルティーリャ（とうもろこしでできた調査地の主食）が販売されるようになった。
農作業時の日雇い労働者への給料の払い方が変化した。かつては、とうもろこしと金とどちらがよいかきいたものだった。今は皆が金を求めるので、金だと。
畑仕事も、牛を使った耕しの方が普通だった状況からトラクターによるそれへと変化し、ロバの糞の肥料としての利用がなくなり、化学肥料の利用となった。
家畜の基本は七面鳥であって、現在のようには羊や山羊は飼っていなかった。
生活用品は服も含めて自分で作っていたし、食器なども今のような既製品ではなかった。家は、木の枝やサトウキビなどでそれぞれ自分で建てていた。今のように、セメントの家を大工に頼んだりはしなかった。
水道も電気もなかった。ガスは、今でも使ってない家が半分程度である。車は、70年代ぐらいから登場しはじめた。
現在、調査地には食料雑貨店や衣服、文具などを扱う45の店が存在する。これは、貨幣経

済化、商品文化の流入の象徴である。3，40 年前には 3 つしか店がなかったといい、最初の店ができたのは、1960 年ごろだという。しかし、それら三つの店で残っているのは、1 つだけである。これができる前は、サチーラという隣町に買い物に行っていた。
何故これほど店が多いのか。少なくとも日本人である私には、これほど沢山の店がこれほどの小さな町でやっていけるのかなぞであった。これについて、店の経営者の一人にインタビューをした。彼女は、2010 年の一月から店を新たに始めている。店からの収入は、警察官である夫の収入の半分程度である。店を始めた理由を彼女はこう語る。「暇ができたからね、もう家に誰もいなくて。一人で家にいるのにね。それで準備して改装して始めた。夫は働きに出るし。息子達もそれぞれだし。」
彼女の弁では暇つぶしであるが、店の増加はこの程度のモチベーションで店を開き、運営していく環境が整ったことにあるといえよう。商品を各店に届けるトラックが運行され、人々はちまちまと商品をそれぞれの店から購入し、店の運営者は多少の儲けさえ出れば店を運営していくのである。それだけで食べていくほどの利益がでなくても、それなりのプラスになるのであれば続ける人がいる、それが多い理由か。店ができるのもなくなるのも早いのもそういった理由であろう。
２、祝祭の変化（聞き取りによる構成）
インタビューでは、昔の祝祭をよかったものとして語る。美しく、信仰心があったと。しかし、それぞれの要素を聞いてみるとそれほど大きな変化はなく、細かな違いであるように思われる。
簡単に言うと、贈り物が果物から既製品にかわり、食器が手作りの者から使い捨てのものにかわり、提供される食べ物が手のかからないものに変化したという。
これらは、物質文化の普及による変化と捉えることができる。大枠は変わらず、要素における使用するものが商品へと変化したのである。
ところでかつてはなかった祝祭として、初聖体拝領と 15 歳を祝う祝祭が挙げられる。現在の 20 代より若い人たちの間で、すなわち、90 年代頃から普及したようだ。また同じく新たな祝祭の要素として、ピニャタ（くす玉割り）が挙げられる。これらは、メキシコの他の地域の要素が調査地にもたらされたものであろう。
また、クリスマス関連の行事も、かつては各家でそれぞれが各自に行っていたものが、共同体挙げての行進と、幾つかの家を回ってのピニャタ割へと変化したという。かつては各家が各家の子供たちを独自にもてなしたと。これは、25 年前にできた小教会の主導へとこの祝

祭が変化したということらしい。
この小教会の誕生は、サンティアゴという、この共同体の最大の祝祭をうむことにもなった。
語りにおいては祝祭の要素の簡素化が嘆かれるが、新たな祝祭の創出、行事の共同体化といった祝祭の拡大の要素も垣間見られる。

以上、調査地において、主に、貨幣経済化が原因とみられる多くの各要素ごとの変化を調査することができた。